

「やはりクリスチャンはそうは考えない」  
～The Way To “The Passion” From “Brave heart”～

【やはりクリスチャンはそうは考えない】

映画 “The Passion of The Christ” に関する私の論評を読んでもくれた親しい米人 D. O. 氏は、友人に敬虔なカトリック教徒がおり、その友人とこの映画についてどっぴりと議論したそうだ。彼が私に言うには、タケナカさんの解釈は、妙に説得的なところがあって面白いが、やはりクリスチャンはこの映画をタケナカさんのようには解釈しない。」

やはりそうだろう。思っていた通りだ。カトリック教徒は、人間の「原罪」を人間が神との契約を破ったため神の恩寵を失ったこととして理解している。もっとストレートに言うと、神が禁じた「善悪の知識の実」をヘビに誘惑されてイブが食べ、イブにそそのかされてアダムが食べたこと、その結果楽園を追放されたことが（＝恩寵を失った）、カトリックの「原罪」なのだ。私が映画から引き出したメッセージである「人間が他の人間に行う残虐」は「原罪」の教義に合わない。イエスが受難を引き受けたのは、人間の「原罪」をあがなうためである。従ってイエスが十字架の上で主に請いた人間への赦しの対象となる罪は、「人間が他の人間に行う罪」ではなく、あくまでも教義で説く「原罪」なのである。カトリック教徒はそう理解する。

しかしキリスト教徒ではない私にとって、伝説上の創世期おけるアダムの過ちなど関わり合いがない。あまりに空想的過ぎて、それを罪として意識することすらできない。それよりも古今東西繰り返えされ、現在でも毎日のように報道されている「人間が他の人間に行う残虐・蛮行」の方が私には遥かに具体的で切迫した「人間の罪」だ。私の考えは非キリスト教徒にとって共通であろう。

【原罪】の創作

しかしカトリックの「原罪」の概念は元々イエスの教えにあったのか？ 「それは元は無かったのではないか」と考えるのは実は私だけではない。1945年に発見された Nag Hamadi 文書、そして50年代に発見された Dead Sea Scrolls (死海文書)<sup>1</sup>、これらの発見を契機とする戦後の福音書の考古学的な研究の結果、オリジナルのイエスの教えに Goddess (崇拝された女性) が存在し、イエスと結ばれていたことが有力な説として浮上して来た<sup>2</sup>。4世紀に確立したローマカトリックは Goddess を記録から抹消し、女性をアダムを誤らせた劣位の存在に落とし、創生期神話を解釈し直し「原罪概念」を創作したのだと言う<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 日本語版「死海文書の謎」P デイビス、大陸書房、1978年、近年別の出版社から復刻版が出ている。私は70年代末に初版を購入して読んだ。

<sup>2</sup> “Jesus And The lost Goddess” Timothy Freeke & Peter Grandy 1999

<sup>3</sup> 最近のベストセラー小説のひとつ“The Da Vinci Code” by Dan Brown は、こうしたキリスト教に関する戦後の考古学的な発見をベースに書かれたミステリーで、大変面白い。カトリックの立場からすると「反カトリック」小説であろう。日本でも今年5月末に邦訳が発売されるそうだ。

「原罪」とは人間存在の前提として与えられた罪であり、人がその罪から赦されるためには、神の前（そしてその Agent としての協会）に跪き、赦しを請う他はない。はっきり言おう。「原罪概念」はローマカトリックの権威の前に人を絶対的に服従させるイデオロギー装置として創作されたのだ。それは人間に「罪の意識＝卑屈」を吹き込む。更にアダムが食べたのが「善悪の知識の実」であったことを思い出そう。知識を求める懐疑と探求は、神の Agent としての教会の絶対的な権威にとって脅威となるので、不信心とされた。これがカトリック思想の反知性主義の核心である。敬虔なキリスト教徒の家生まれたニーチェが必死の戦いを挑んだキリスト教の核心が「原罪概念」に集約されているのだ。

こんなことは、今更私が言わなくても、西欧思想史の常識、コンセンサスとして欧米社会では共有されていてよい認識なのだが、ニーチェ以前の世界観で生きている人々が後を絶たないのが現実である。

### 【“Braveheart” から “The passion” への道】

映画 “The Passion” に話を戻そう。Mel Gibson はカトリック教徒だと言われる。しかしこの映画の中には、私が見る限り、カトリックの「原罪概念」を強調するどころか、示唆するものさえ見当たらない。イエスの受難は人間の「原罪」をあがなうためだと言われているにもかかわらず、どうして肝心のものが抜けているのか？ 「原罪概念」はカトリック教徒の彼にとってはあまりに前提的なので描かれなかったのだろうか？ それならば、彼はキリスト教徒のみを対象にこの映画を作ったことになる。そうではあるまい。彼は映画人として世界中の人間が見ることを想定して作ったはずだ。

「原罪概念」に代わって彼が映画の中で執拗に再現したのは「人間が他の人間に行う残虐」である。Gibson は特定の教義としての「原罪概念」を乗り越えて、人間にとってよりラディカルな問いを発したのだと私が理解した理由がここにある。Gibson の主演兼監督映画の映画”Braveheart”（1995年）を思い出そう。イングランド王の侵略と支配に対して故郷スコットランド人の自由と独立を求め、妥協のない戦いを繰り広げた伝説的な英雄 William Wallace の物語である。Gibson はこの映画を完成させてから、「この映画を作るために自分は映画界に身を投じたのだと感じた」と語ったのをTV番組で見たことがある。彼が精魂傾けた傑作である。

この映画のメッセージは、“The Passion”より遥かにストレートで判りやすい。「人間の尊厳、その条件としての自由と独立、そのためには人は妥協のない戦いをしなくてはならない。」この映画の好き嫌いは別にして、これが Gibson のメッセージであったことに異論はないはずだ。映画のラストシーンで Gibson の演じる主人公は、イエスの処刑に匹敵する惨い刑で処刑される。「生きたまま、腹わた引きずり出しの刑」である。ただし “The Passion” ほどリアルには描いていない。<sup>4</sup>

Gibson が “Braveheart” で発したメッセージの帰結は、人間が尊厳を回復するための

---

<sup>4</sup> Gibson は 2002 年に “Signs” という奇妙な映画に主演している。この映画の謎解きはまた別の機会にすると、ストーリーは、妻の悲惨な事故で信仰心を失った神父（主人公）が、自分らを見守る神の Signs に満ちていることに気が付き、最後に再び信仰を取り戻すものだ。回復された信仰心がどのような境地かは十分に描かれていない。ただし以前と同じ次元での信仰の回復ではないらしい。

最大の難敵は「人間が他の人間に対する残虐・蛮行」であるということになるのではないか。この問題をつき詰め、ついにカトリックの「原罪教義」を乗り越えるラディカルな境地に彼は到達したのではなかろうか？ ただしあからさまに教義の否定をするのではなく、「人間の他の人間に対する残虐」を徹底的にリアルに再現することで、彼のメッセージを含意したのだ。Gibson の “The Passion” のメッセージは、「原罪教義」をすり込まれたキリスト教徒には理解できないほどラディカルなのである。

以上